

2.2 キリスト教の思想と信仰

2.2.1 ユダヤ教・旧約聖書の思想

ユダヤ教 Judaism

: 唯一神 () の啓示を受けたイスラエル (ヘブライ・ユダヤ) 民族の宗教。
律法主義, 選民思想, メシア思想などを特徴とする。

【神の名前について】

יְהוָה YHWH (神聖四文字テトラグラマトン) = (? ?) = アドナイ(主)

【ユダヤ教の正典】

『() (トーラー)』『預言者 (ネビーイーム)』『諸書 (ケスービーム)』: 3部 24巻
⇒頭文字をとって『タナハ』 ,
『律法 (トーラー)』 = 『モーセ五書』ともされる
『モーセ五書』: ①「() 記」 ②「() 記」 ③「レビ記」 ④「民数記」 ⑤「申命記」
⇒前3～前1世紀, () 語からギリシア語訳 = 七十人訳聖書 (セプトゥアギンタ)
⇒キリスト教で自己の正典の一部とする = 『() 聖書』 39巻

イスラエル民族の歴史

・ アブラハムの信仰 (約 4,000 年前)

交易都市ハランに住むヘブライ人の族長 () は彼の子孫に
(= 後のパレスチナ) を与えるという神の約束を受け, その約束に希望をかけ, 一族を率いて旅立つ。
⇒アブラハムの子孫は選ばれた民, () であるという信仰
アブラハムの孫, ヤコブ () は 12 人の子どもたち (12 部族の祖) と飢饉を逃れてカナンからエジプトへ移住する。

・ () の出エジプト Exodus (前 13 世紀)

エジプトで奴隷として苦しむイスラエル人を, 神の (revelation) をうけた
モーセが民族を率いてエジプトを脱出。その途中 () 山でヤハウエから
() を授かる。神との約束の地, カナンへ民を導いた。
Cf. 十戒 ⇒ 資 p.40

・ イスラエル王国の栄華 (前 1,000 年頃)

ユダ族出身の () が王となりシリア・パレスティナにまたがる大帝国を建設しエルサレムを首都に定める。その子 () はエルサレムに主の神殿を建設する。
⇒ (: 救世主, ギリシア語では $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\sigma$ christos) : もとは油を注がれた者の意味。ユダヤ教徒が待望する, イスラエル民族の国家再興を実現し, 現世に神の計画を実行してくれる王。ダビデ家の子孫からあらわれるとする信仰が生じた。

・ () 捕囚 (前 6 世紀頃) : 新バビロニア王ネブカドネザル 2 世が, ユダとエルサレムの住民の大多数を捕らえバビロニアに移した事件→ユダヤ人共同体, ユダヤ教の成立

2.2.2 イエスの教え

【新約聖書（全 27 巻）の構成】

1. 「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」
⇒ (Evangel, Gospel) : イエスの生涯と教えを記した書物。喜ばしい知らせ。
2. 「使徒言行録」: 使徒たちによる伝道の記録
3. 「ローマ人への手紙」など 21 の手紙: 信仰についての解説, 激励, 感謝
4. 「ヨハネの黙示録」: 最後の審判, 神の国の到来についての預言

【イエスの生涯】

B.C.4 年頃?, ナザレの大工 () と () の子として生まれる。福音書によると, 聖霊によってマリアが懐妊し, () の家畜小屋で生まれたという。

30 歳頃, 洗礼者 (バプテスマの) () から洗礼を受けたのち, 荒野で 40 日間サタンと戦ってこれに打ち勝つ。ガリラヤの野で多くの奇跡を行ない, () 人の弟子²とともに「神の国は近づいた, 悔い改めて福音を信じなさい。」と説いた。そして, 律法主義³, 形式主義をとるユダヤ教の学者やパリサイ人 (びと) を激しく非難する。

イエスの教えは無差別・無報酬の愛 () の教えであり, 民衆の歓迎を受けたが, イエスから批判されていた宗教勢力がイエスの教えと力を妬み, 神の子と称するイエスを流神者として告発した。

イスカリオテの () はイエスを裏切り, イエスを敵対者に売り渡した。ローマ総督 () はイエスを死刑にする罪を見出すことができなかったが, 民衆の声に従い, されこうべ (希 Golgotha, 羅 Calvaria) の丘で十字架にかけて処刑する。(金曜日)

しかし, 預言の通り 3 日後(日曜日)にイエスが () したという信仰が弟子の間に生まれ, イエスこそキリスト () であるとする, 原始キリスト教が誕生した。

- 【イエスの教え：最も大切な掟】: イエスのオリジナルではなく () からの引用
- ① () への愛: 「心をつくし, 精神をつくし, 思いをつくし, 力をつくして, あなたの () である主を愛しなさい」(申命記 6:5) ⇒ (マタイ 22:37-38)
- ② () 愛: 「() を自分のように愛しなさい。」(レビ記 19:18) ⇒ (マタイ 22:39)

隣人愛のありかた: 隣人とは誰か? どのように愛すべきか?

「人にしてもらいたいと思うことを, 人にもしなさい。」(ルカ 6:31) ⇒ 良きサマリア人のたとえ

Cf. 19 世紀功利主義の哲学者 J・S・ミル『功利主義論』より

ナザレのイエスの () の中に, われわれは功利主義倫理の完全な精神を読みとる。おのれの欲するところを人にほどこし, おのれのごとく隣人を愛せよというのは, 功利主義道徳の理想的極致である。

¹ 罪人として差別され, 交際することを禁じられていた身体障害者, 病人たち, とくに精神病患者やハンセン病患者と, 法を犯してまでも関わり, みずからがいれば彼らの一人となることによって障害や病気をいやそうとした

² 12 使徒: ペテロ(最初の教会を建て), ヤコブ, ヨハネ, アンデレ, ピリポ, バルトロマイ, マタイ, トマス, アルパヨの子ヤコブ, タダイ(ユダ), シモン, イスカリオテのユダ[死後マツテヤ補充]

³ 律法を守って正しい生活をした人々のみが終末のときに神の国に入れられ, 律法を守らない人々は神の国から閉め出されるとする考え。

イエスの律法主義批判

() 主義：当時ユダヤの支配者たち、とくに政治的・宗教的エリートたち(サドカイ派、とりわけパリサイ派の人々)は、彼らの生活の価値基準を、神から与えられた律法に置いていた。彼らは律法を守って倫理的に正しい生活をした人々がその功績によって終末のときに〈神の国〉に入れられ、律法を守らない人々は〈神の国〉から閉め出されると確信していた。

() 派：律法の遵守を説く平民の律法学者・学者・教師たち

() 派：政治的・宗教的・社会的支配権を握る、エルサレムの貴族祭司層とユダヤの地方貴族・地主たち

【律法（トーラー）の中の戒律】計613＝義務248（人間の骨の数）+禁忌365（1年）

「人が自分の男奴隷あるいは女奴隷の目を打って、目がつぶれた場合、その目の償いとして、その者を自由にして去らせねばならない。」（出エジプト記21：26）

「地上のあらゆる動物のうちで、あなたたちの食べてよい生き物は、ひづめが分かち、完全に割れており、しかも反すうするものである。…らくだは反すうするが、ひづめが分かちされていないから、汚れたものである。…野兎も反すうするがひづめが分かちされていないから汚れたものである。いのししはひづめが分かち、完全に割れているが、全く反すうしないから汚れたものである。」（レビ記11：2-7）

⇒○鱗と鰭のある魚、鶏、七面鳥、

×ラクダ、野ウサギ、岩タヌキ、豚肉、馬肉、ナマコ、イカ、タコ、エビカニ、ナマズ、貝類、病死した動物の肉、肉と乳の混合

イエスの批判：

「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。その時、イエスの前に水腫を患っている人がいた。そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。『安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。』彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして、言われた。『あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらないものがあるだろうか。』彼らは、これに対して答えることができなかった。」（ルカ14:1-6）

「() は人のためにあるもので、人が() のためにあるのではない」
（マルコ2：27）

「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った() に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。」
（マタイ23:27-28）

⇒イエスのふれあった人々：疎外され、抑圧される人々：徴税人、罪人（律法を守られない人々）、貧しい人、病める人（狂気、ハンセン氏病含む）、差別されていたサマリア人

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、() するためである。」（マタイ5-17）

cf.放蕩息子のたとえに見られる神の姿は？（義の神 or 愛の神）

1. さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、”霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして 40 日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑するものが来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。
『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。
(マタイによる福音書 4:1-4)
2. 「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとするものには、上着をも取らせなさい。」
(マタイによる福音書 5:38-40)
3. 「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。だれでも、求めるものは受け、探すものは見つけ、門をたたくものには開かれる。」
(マタイによる福音書 7:7-8)
4. (イエスが弟子のユダに裏切られ、逮捕される時イエスと一緒にいた者が大司祭の手下に切りかかり片耳を切り落とす) そこでイエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取るものはみな、剣で滅びる。」
(マタイによる福音書 26:52)
5. (ユダヤ教学者たちが姦通 [不倫] の現場で捕らえられた女を連れてきてイエスに言った「こういう女は石で打ち殺せとモーセは命じています。あなたはどう考えますか。’) かれらがしつこく問いつづけるのでイエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まずこの女に石を投げなさい。」
(ヨハネによる福音書 8:7)
6. 「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分に善くしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるろうか。罪人でも同じことをしている。返してもらおうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるろうか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。」
(ルカによる福音書 6:31-35)
7. たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私たちは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、私に何の益もない。
愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。
(コリントの信徒への手紙 13:1-8 「愛の賛歌」)

2.2.3 原始キリスト教

・最後の（ ）

：イエスが十字架につけられる前の晩に 12 人の弟子たちとともにいった晩餐。この晩餐の席上で、イエスは自分を裏切ろうとしている者(イスカリオテのユダ)がいることを指摘するとともに、（ ）と（ ）をとって、それが自分の体であり、多くの人のために流す契約の血であると言った。
⇒ 主の晩餐の儀式・聖餐式(ミサ)の由来となる

・イエスの受難

受難 **Passion** : イエスの十字架上での死
⇒ パウロはすべての人間の罪の贖い（ ）であると説く。

・イエスの（ ） Resurrection

：ゴルゴタの丘で処刑されたイエスは死後墓に納められたが、3日目の朝、墓は空になり、弟子たちの前に姿をあらわしたとされる。⇒ 人間にとって死が終わりではなく、人間にも復活があるという信仰

・聖霊降臨 **Pentecost**

イエスは復活の後、弟子たちの間に数回出現し、復活から 40 日目に、使徒たちの見ている前で天にあげられ神の右に座したとされる。【イエスの（ ）】 イエスの復活から 50 日目に弟子たちに聖霊が下ったとされ、それを（ ）と呼び、初代教会の誕生の日として記念されている。

（ ） 英 Peter 希 Petros

十二使徒の筆頭。前名はシモン(シメオン)。ガリラヤの漁師であったがイエスの信頼をうけ、ペテロ(岩)の名を与えられた。キリスト受難に際してイエスを3度知らないと言い逃亡するが、のち回心し、伝道にあたり、ネロの迫害を受けて殉教したといわれる。イエスにより教会の岩とされ、天国の鍵を授けられたという理由から、彼は古代教会以来、ことにローマ・カトリック教会で、使徒たちのなかでも特別に重要視された。ローマ教皇は彼の後継者とされている。

パウロ 英 Paul 希 Paulos

一世紀のキリスト教の伝道者。ユダヤ人で律法に熱心な（ ）派としてキリスト教徒を迫害していたが、復活したキリストの声を聞き、回心して使徒となった。三回の大伝道旅行を行い、キリスト教のローマ帝国内への普及に貢献し、ローマで殉教した。

cf. 回心とは…

「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、（ ）によるというのが、私たちの考えです」(ローマ 3:28)

パウロによるイエスの十字架上での死の意味づけ

：原罪(アダムとイヴによる聖性と義の喪失)以来、人間には悪への傾向がある

→原罪に対する罰が（ ）

⇒十字架上のイエスの死は神に対するいけにえ

＝すべての人間の罪の贖い(贖罪)＝神の愛と恵み

⇒イエスの復活は死が終わりではないことを保証＝からだの復活永遠の命への希望

2.2.4 キリスト教の展開

キリスト教哲学に影響を与えた思想

- () **主義**：キリスト教とほぼ同時期に地中海世界に興った折衷的宗教運動。極端な霊肉二元論。啓示者よりグノーシス（知識・認識）が与えられることにより人間は覚醒し、魂は悪の支配する地上世界から解放されて神的な光明の国に上昇して神となるとする。
- ※旧約の神（創造神 [物的]）と新約の神（父なる主 [霊的]）とを別の存在としたり、キリストは肉体的存在ではない（仮現説）と説くマルキオン（2世紀）などのキリスト教グノーシス派への対抗
- ⇒新約聖書の正典化（権威が教団によって公認された特別の書物の確定）の動機となる

新プラトン主義：後3世紀ローマ時代、() によって創始される。世界は3つの原理的な力と物質界からなるとする。究極の原理である**一者**（ト・ヘン）から**知性**（ヌース）が流出し、知性から**魂**（プシユケー）が流出し、魂が生物や物的世界を構成する。人間は内的世界に目を向けることによって、3つの原理的力に触れることができ、段階を踏んで**一者に合一**することができるとする。

※アウグスティヌス、ボエティウス、偽ディオニュシウス・アレオパギタなどの著作を通してキリスト教の教義形成に無視できない影響を与えた

Cf.父と子と聖霊の関係は？ :

教父哲学

- () **Church Father**
- : 古代および中世初期の有力なキリスト教著作家のうち、教会によって正統信仰の伝承者として認められた理論的指導者。その著作は、聖書の権威に次ぐ、あるいはそれに匹敵する権威を持つ。教義の形成に直接たずさわり、キリスト教が世界宗教になる基盤を築いた。

ギリシア教父

・アレクサンドリア学派

アレクサンドリアのクレメンス（Clemens, 150頃～215頃）

グノーシスをはじめとする異端の説を退けつつ、() 的教養の価値を積極的に認め、キリスト教哲学の原型を形成。人間精神は神を定義することも認識しつくすこともできないが神の直感に無限に前進することができるとした。

⇒知識層に対してキリスト教の門戸を開く

オリゲネス（Origenes, 185頃～254頃）

最初の聖書学者。神は善そのものであり、存在そのものであり、存在すべてのものの源である。したがって、神は最終的にはすべての魂、すべての人間を自らのもとに（各自の同意を通じて）帰還させ、永遠の命を与える。【万物の回復（アポカタスタシス）説】⇒この神学の一部を強調するオリゲネス主義は後に() として弾劾された。

ラテン教父

：古代教会の教父はほとんどギリシア語を用いたので、〈ギリシア教父〉と呼び、他方、ラテン語を用いた西方教会の教父、キプリアヌス、ヒエロニムス、アウグスティヌスなどは〈ラテン教父〉と呼ばれる。

() Quintus Septimius Florens Tertullianus (160頃～220以後)

：西方教会の最初の教父、護教家。反グノーシス教父のひとりに数えられる。「キリストは肉となった。これは愚かであるがゆえに信じる」(《キリストの肉について》5章)という言葉は、「不合理なるがゆえに我信ず credo, quia absurdum est」の典拠とされる。

アウグスティヌス Aurelius Augustinus (354～430)

：西方キリスト教会の最も重要な教父。() 教を信仰していた時代もあったが、教父アンブロシウスに会い回心。信仰の基礎となるもの、信仰が含んでいる意味を、理性的・哲学的に解明することに努めた。() 派哲学の影響を受けたその理論は、中世思想界に決定的な影響を与えた。代表的著作は『告白』『神の国』『三位一体論』など。

【思想】

- ・人間はどのようにして原罪から救われるか？
⇒人間の自由意志に従い善を行うことによって(ペラギウス主義)ではなく、神の(gratia)によって救われる。
- ・キリスト教における基本的な徳は何か？
⇒パウロの言葉にあるように()と()と()である。
＝キリスト教の三元徳：信仰に始まり、希望によって強められる神への歩みは、愛徳(カリタス)において完成される
- ・神の国と地上の国の違いは？
地上の国：自己を絶対化する高慢な欲望を目的とする国………世俗国家
神の国(支配)：永遠なる神に心開く愛を目的とする共同体………()の中に…
- ・神とはどのような存在か？
⇒アタナシオスが主張したように、父(創造主)と子(イエス)と聖霊は三つの位格(ペルソナ)でありながら神の本性としては一つである()論。アウグスティヌスは、聖霊は父と子から永遠に発出するという教義を確認した。

() 哲学 Scholasticism

：ローマカトリック教会の教義を信仰をもって受け入れたうえで、それを主としてプラトンおよびアリストテレス哲学の助けをかりて理解しようとする哲学。西洋中世の大聖堂や修道院の付属学校(スコラ)で研究教授された。

「哲学は神学の()である ancilla theologiae」：理性に対する信仰の優位をあらわす

() Anselmus Cantuariensis 1033 - 1109

：初期スコラの神学者。スコラ哲学の父。1093年にカンタベリーの大司教に任ぜられ、死ぬまでその職にあった。「知らんがために我信ず(credo ut intelligam)の原則に従って、信仰に始まり、その根拠を聖書の權威に頼ることなく探究しようとする。神の存在論的証明やキリストの贖罪論の理論化を行なった。

() 論争：普遍は自然的実在であるとする説（実念論（実在論）：アンセルムスなど）と、普遍は知性の構成物にすぎない（唯名論（名目論）：オッカムなど）とする説の間で行われた中世哲学最大の論争。

※普遍：多くの事物をある観点から総括し、一つのものとして把握する働きが思考の働きであり、そこに把握される「一つのもの」（多を通ずる1）が普遍である。e.g. 「人」「長高生」「日本人」

実念論 **realism**：普遍的概念の実在性を主張する。類、種、種差などの〈普遍〉は、個物から独立し、個物に先立って実在すると説く、広義のプラトン主義的実念論が典型。個物のみ実在すると説く唯名論がこれに対立する。のち、普遍は個物においてのみ実在すると説く、ゆるやかなアリストテレス的実念論が登場した。前者はエリウゲナ、**アンセルムス**、シャンポーのギヨームらが、後者はラ・ポレのジルベール、ソールズベリーのヨハネス、**トマス・アクイナス**らが代表。

唯名論 **nominalism**：名目論ともいう。個物のみ実在し、類・種などの普遍は実在せず、ただ人間の精神の中で個物の後に生じると説く。普遍は等しい個物に対する単なる〈声〉ないし〈名〉であるか、個物に面して精神が懐胎し総括する〈概念〉または概念の概念として精神により〈総括された記号〉とされる。ロスケリヌス、**アベラール**、**オッカム**が代表者。唯名論は個体主義・感覚論への傾向をもち、近世の経験論を準備した。

11 世紀後半、周辺民族の侵入停止⇒ヨーロッパ対外進出

e.g. スペイン、レコンキスタ（国土回復戦争）ノルマン騎士、シチリア島の征服（両シチリア王国形成）、シリア・パレスチナ十字軍 ⇒ イスラム世界・ビザンティン文化圏との接触

() ルネサンス：イスラム文明を通しての古代ギリシア・ローマ文化の復興。アリストテレスの主要作品、ユークリッド、プトレマイオス、アピセンナ（イブン・シーナー）などが、スペイン・トレドやシチリア・パレルモでギリシア語、アラビア語からラテン語に訳された。特にアヴェロエス（イブン・ルシュド）のアリストテレス注釈と信仰の真理と哲学（理性）の真理を区別する二重真理説はアヴェロエス主義といわれる。⇒

() **Thomas Aquinas** (1225 頃～1274)

：イタリアの神学者、哲学者。ドミニコ教団所属。**スコラ哲学の完成者**。**アリストテレス哲学**と神学、すなわち()と()の調和をはかり、**実在論**の立場にたち、**教会の現世支配**を認めた。主著『()』。

理性は神によって作られた自然・信仰は神の啓示 ⇒ 同じ真理の源泉にさかのぼるもの…調和

自然法：すべての人間の理性に対して、神の世界統治の理念である永遠法を刻印したものの

※ 思想史におけるトマスの意義は、**信仰と理性との統一**を目ざして形成され、この統一が破れたときに崩壊したスコラ学との関係において明らかになる。すなわち彼は、信仰と理性とを分離したうえでそのいずれかの優越を主張するのではなく、あくまでこの2者の内的総合を追究し、信仰の超越性(神中心主義)と人間理性の自律性(人間中心主義)とを、緊張をはらみつつ両立させるという、一見不可能ともみえる企てを成功させたのである。この**トマスの総合**の根底に見いだされるのが、アリストテレスや新プラトン主義哲学を継承し、それらをさらに展開させることによって成立したトマスの独創的な〈存在 esse〉の形而上学であるが、それは彼においては徹底した経験論的立場と両立していた。またトマスはアリストテレス流の厳格な学の条件を満たす、〈学としての神学〉を成立させたが、同時に神についての最高の知は無知の自覚であることを強調してやまない〈否定神学〉の提唱者であり、神秘主義者であった。（『世界大百科事典』平凡社より）

